

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	坂井 祐円
論文題目	仏教思想に基づくケア論の展開		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は「仏教とケアの連関」を課題とする。ケアの営みを仏教思想の視点から検討し「仏教思想に基づくケア論」を構想した意欲的な論文である。</p> <p>本論文における「仏教」は「制度化された宗教＝形のある仏教」ではなく、むしろ「形なき仏教」、すなわち「霊性的自覚としての仏教」である。他方「ケア」の思想は、ケアの営みとその深みにおいて「スピリチュアリティ」に触れざるを得ないことが示され、議論の焦点が「スピリチュアルケア」に絞られる。</p> <p>その上で「スピリチュアルケアを考察するための三つの論点」が示される。</p> <p>①「ケアする人がスピリチュアリティに開かれてゆくこと（ケアする人の自己変容）」。②「ケアの場にスピリチュアリティがはたらくこと（ケアする人とされる人との関係性）」。③「スピリチュアリティの広がりとしての死の向こう側の世界（死者と生者の実存協同）」。以下、論述はこの三つの論点に沿い、三部構成を成して展開されてゆくが、終章において実はこの三つの論点がすべての章において登場していたことが示される。すなわち「自己変容」「関係性」「実存協同」の三つの論点は「①自己変容→②関係性→③実存協同→①自己変容→②・・・」と循環する仕方、本論文全体を貫く「三つの構造的契機」、本論文の屋台骨である。</p> <p>さて、第一章は、現代のケア論の限界を示す。現代のケア論の多くがヒューマニズムに基づいたものであること、したがって或る限界を持つこと、そしてその限界を乗り越える視座として「スピリチュアリティ（霊性）」が示される。</p> <p>第二章は、先行する「スピリチュアリティに開かれたケア論」の検討。ビハーラ運動、仏教的スピリチュアルケア、仏教心理学、仏教看護などが検討される。</p> <p>続く、第三章・第四章は<①ケアする人の問題、その自己変容の問題>を扱う。</p> <p>第三章は、ケアにおける精神的態度として「慈悲」のあり方を検討する。ケアする人がスピリチュアリティに開かれるとき、ケア精神的態度は、慈悲として表われる。「四無量心としての慈悲」から「無縁の大悲」への展開を検討することによって「ヒューマニズムに基づくケア」の限界を乗り越える課題に答えている。</p> <p>第四章は、ケアする人の自己変容の問題である。ケアする人がスピリチュアリティに開かれる場合、そこには必然的に自己変容が伴う。それは、仏教思想の中で「悟りの根拠としての仏性」として論じられてきた問題である。人間のもつ根深い我執性、意識における執着、マナ識における執着、そしてそれらを克服する課題に答える。</p> <p>続く第五章・第六章は<②ケアする人とされる人との関係性>の考察である。</p>			

(続紙 2)

第五章は、ケアの関係性が深まりゆくプロセスについての検討。ケアする人とされる人は相互に影響し合いながら「ケアの場にはたらく生成力」によって深まってゆく点が「縁起」思想によって明らかにされる。とりわけ華嚴思想における「法界縁起」の思想（「事法界」→「理法界」→「理事無碍法界」→「事事無碍法界」）が関係性の生成変化を明らかにした理論枠組みとして解きほぐされる。

第六章は、仏教カウンセリングに関する検討である。ケアの関係性が深まる時、ケアする人とケアされる人の協同は「ケアの関係性にはたらく生成力」に委ねられる。この生成力に開かれるあり方を「聞法（＝法Dharmaを聞く）」へと高めたのが、仏教カウンセリングである。この「聞法」概念が検討される。

この後に、「補論、ケアの関係性が死の向こう側に開かれること」が挿入される。仏教カウンセリングは「死の向こう側」に言及していない点が批判され、「死者のケア」を問う必要性が示される。では「死の向こう側」がケアの関係性の構造においていかに問題になるのか。死生観の空洞化、霊魂の实在、葬式仏教などのテーマが検証される。第七章以下の議論への橋渡しとなっている。

続く、第七章・第八章・第九章は<③死者と生者の実存協同>の考察である。

第七章は、死の向こう側の世界、すなわち他界観念を、阿弥陀仏信仰における「浄土」の思想と重なる仕方で検討する。中世の浄土思想は、死後において浄土に往生するという救済を求めた。苦しい現実からの逃避に見えるが、実は、浄土のヴィジョンを通して人々を悟りの世界へと誘引するという意義があった。

第八章は、死者に向けられたケアの問題。日本の中世は、自らの死後における浄土往生を希求すると共に、すでに亡くなった死者の救済にも大きな関心を寄せた。死者への真摯な思いは、死別の場面において顕著に現われ、葬儀や法要において「回向供養」という形で営まれてきた。しかし回向供養は、単に死者の救済だけが目的ではなかった。むしろ、生者の側にとっての意味、すなわち、生者が死者の側から供養されるという点こそが重要であった。

第九章は、死者との実存協同の問題。田辺元の「死の哲学」によれば、死者は「還相の菩薩」となって生者に対し覚醒を促し、そこに「死者との実存協同」が成り立つ。「還相の菩薩としての死者」とは、スピリチュアリティに開かれた人への死の向こう側からの呼び声である。

こうして、死者からの慈悲のはたらきによって自己変容が引き起こされ、それがまた他者に対する慈悲の行為となって展開する。すなわち「①自己変容→②関係性→③実存協同→④自己変容→②・・・」という循環として示されるケアの関係性が、仏教思想に基づくケア論の構図として提示されたことになる。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせ

て、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は「仏教」と「ケア」の関連を問い直した思想研究である。ケアの営みを仏教思想の視点から肉付けすることによって「仏教思想に基づくケア論」を構想したものである。

従来、ケアの問題を仏教思想の視点から読み直す仕事は、本格的にはなされてこなかった。断片的になされてきた従来の研究を包括的に批判検討し、一方では、ケアをめぐるノディングスやメイヤロフの思想を、他方では、唯識思想、華嚴思想、あるいは、親鸞や道元、さらには田辺元「死の哲学」まで、幅広い視野のもとに文献を渉猟し、ひとつの構図のもとにまとめ上げた仕事は評価に値する。

本論文の優れた点は、論文の骨格をなすグランドデザインである。

第一に、「仏教とケア」の接合面の設定に成功している。本論文における「仏教」概念は「既成の宗派＝形のある仏教」ではなく「形なき仏教」、すなわち「霊性的自覚としての仏教」である（鈴木大拙の用語で言えば「無分別智」に対応する）。他方、「ケア」の思想は、その深みにおいて「スピリチュアリティ」に触れざるを得ないことが示され、「スピリチュアルケア」が議論の焦点に設定される。つまり、本論文は、一方で仏教思想を「霊性」の位相で理解し、他方でケアの問題を「スピリチュアリティ」の位相で理解することによって、宗教を排除することなく、しかし特定宗派の教義に回収されることなく、「仏教とケア」の接合面を慎重に検討することに成功している。

第二に、論文全体を貫く構図が巧みである。まずスピリチュアルケアを考察するための三つの論点が確定され、本論はこの三つの論点に沿って三部構成をなす。「①ケアする人がスピリチュアリティに開かれてゆくこと（ケアする人の自己変容の問題＝第三・第四章）」。「②ケアの場にスピリチュアリティがはたらくこと（ケアする人とされる人との関係性の問題＝第五・第六章）」。「③スピリチュアリティの広がりとしての死の向こう側の世界（死者と生者の実存協同の問題＝第七・第八・第九章）」。ところが終章に至ると、この三つの論点が実はすべての章に含まれていたことが示される。すなわち「①自己変容→②関係性→③実存協同→①自己変容→②・・・」と循環しながら、論文全体を貫く「三つの構造的契機」であったことが示される。

第三に、ケアの問題に即して「慈悲」「仏性」「縁起」「聞法」「浄土」「回向供養」「還相の菩薩」という七つの仏教語を読み直し「ケアの視点から見た仏教思想（霊性的自覚としての仏教）」を構想した点が評価される。それは単にケア論にとって新しい知見を提供しただけではなく、現代における仏教理解にとって、すなわち、仏教がアクチュアルな実践的課題に対していかなる意味を果たし得るかという切実な課題に答えている点においても評価された。

(続紙 4)

さて、以上の考察を通して確認された成果は以下の点である。

第一、ケアの思想はその深みにおいて「スピリチュアリティ」に触れざるを得ない。少なくとも、スピリチュアリティの視点が加わる時、ケアの思想はより豊かに展開される。「ケア」概念の根本的な再検討が必要とされている今日、こうした視点は貴重である。

第二、そのひとつとして仏教思想が再評価される。それは必ずしも「既成の仏教宗派」と結びつく必要はなく、まして特定宗派の優位を語るものではない。むしろ、仏教思想を人間研究の蓄積として理解し、今日のアクチュアルな課題に即して豊かに読み直す可能性を示している。

第三、とりわけ「死者のケア」という視点は重要である。ケアの関係性は死の向こう側にも開かれている。それは、一方では<生者の側が死者を供養する>ということであり、他方では<死者の側が生者に呼び掛ける>ということでもある。「死者からの慈悲のはたらきによって自己変容が引き起こされる」という視点は、今日の人間研究にとって重要な問題提起である。

第四、仏教教理上の重要概念を今日の人間研究の視点から新たに読み替える可能性が示された。例えば「仏性」を「自己変容を起こす原動力」と読み換え、「縁起」を「ケアの関係性の成熟」として読み換える可能性。それは、教育人間学・臨床教育学の視点から伝統思想を読み拓く試みであり、同時に、仏教教理を新たな視点から豊かに解釈する挑戦的な試みとしても評価された。

むろん、試問においてはいくつかの問題点も指摘された。1、本論文の「仏教」理解が(とりわけ論文後半部において)浄土系の思想に集中し、例えば密教的な仏教理解が十分に反映されていない点、2、仏教用語に込められた智慧を仏教の外に開いてゆくための更なる工夫が必要である点、3、ジェンダー・バイアスの問題への言及がない点、など幾多の指摘があったが、これらの問題はすべて本人自身十分に自覚しており、今後の課題として確認されるため、本研究の学位論文としての価値をいささかも減ずるものではないと判断された。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認めた。

また、平成25年2月8日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降